

9月7日 年間第23主日

イザ 35:4～7a ヤコ 2:1～5 マコ 7:31～37

1. マコ

この奇跡物語りは、マルコ福音書の中で 8:22-26 と対になっているものです。この物語りが 5 千人に食べ物を与えられた話から始まる一連の叙述の最後に置かれているのに対して、後者はもう一つの 4 千人に食べ物を与えられた話から始まる一連の叙述の最後に置かれています。

両者とも、いやしの奇跡は簡単にではなくて、ある程度の手順を踏んでやっと実現しています。ここでは主イエスは“天を仰いで”、“深く息をついて”、この人を捕えているサタンに戦いを挑んで「エツファタ」と言われました。恐らくこれはサタンを打ち退ける命令であり、それによって「耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるように」(v.35) になりました。

マルコ福音書は明らかに意図的に、この対になった二つの奇跡物語りに、さらに 8:27-30 のペトロの信仰告白を結びつけています。イエスのいやしの奇跡は、イザヤに預言された終末的なメシアの時代の到来のしるしであったというのが、先ず第一の使信であり、それに加えて、ペトロの信仰告白に至る弟子たちのメシア信仰への目覚めの動機となったという第二の使信が重ねられているのです。

主イエスが弟子たちに向かって「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか」(8:18)と言われた言葉は、上記の使信の補足説明と考えてよいでしょう。イエスをメシア(キリスト)であると信じることが出来るように弟子たちの目を開き、その信仰を人々に宣言することが出来るように弟子たちの口を開いてくださったのは、主イエスの奇跡の力であったと、マルコ福音書は述べているのです。

2. ヤコ

私たちの判断は、目から入って来る印象によって影響されるので、教会に集まる人々の服装によって差別をしてしまうことは、今も十分にあり得ることです。学歴や社会的地位や、その人の過去の経歴や出自などが、実際には私たちの判断を大いに左右します。しかしキリスト者である私たちが目を向けるべきことは、別にあると、聖書は語りかけています。

v.5 「わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自分を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。」

私たちキリスト者が受けた救いは、人の業ではなくて、神の業なのです。そして、あらゆる人間の罪と過ちの現実のただ中であって、私たちはあえて神がキリストによって私たちのために実現してくださった救いに目を向けるようにと、呼びかけられています。罪や過ちのない世の中を実現することは、聖書の目指していることではありません。そうではなくて、神がキリストによって私たちに“来たるべき世(神の国)”を受け継ぐ者としてくださったことに希望を置くことを、聖書は幾重にも呼びかけているのです。

3.

イエスはキリストであると認める信仰の目を開かれたのは、神の業、すなわち奇跡であり、この福音この信仰を宣言し宣教する私たちの口を開いてくださるのも、神の奇跡の業であるということを、代々の教会は信じて来ました。

21世紀の教会も、この信仰を受け継いで歩んで行きます。主イエス・キリストが再び来られる神の国完成の日まで、地上の教会はその存在の拠り所がただ天上のキリストにあって、人間の業にあるのではないことを、私たちは繰り返し思い起こしましょう。聖書を通して神のことばが人々に聞かれているとき、そこには今も神の奇跡の業が生起し、教会は生きているのですから。

アーメン、ハレルヤ。

9月14日 十字架称賛

民 21:4～9 フィリ 2:6～11 ヨハ 3:13～17

1. フィリ

使徒パウロがフィリピの教会に書き送った手紙の中に、初期の教会の賛歌と思われるものが引用されました。vv.6-11がそれで、これはキリストの死に至るまでのへりくだり(従順)と、あらゆる名にまさる名を与えられて高く上げられたことを歌っているものです。

「神と等しい者であること」(v.6)をサタンは望み、蛇に誘惑されたアダムとエバは“神のように賢くなる”ことを求めて罪を犯しました(創3:4-6)。しかし“神の身分である”キリストは、自らを無にして僕の身分になり、人間と同じ者になりました。キリストの十字架の死は、へりくだりと従順でありました。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。」(1ペト2:24)「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」(v.9)

ここで注意しなければならないことは、主イエスは自らを十字架にいけにえとしてささげることによって、初めて主また神の子としての身分を獲得したのではないということです。神の側から言えば、キリストは受肉以前からすでに神の身分でありました。しかし私たちキリスト者の側から言えば、十字架と復活の出来事を経て初めて、公に主また神の子として宣言され礼拝される方と定められたのでした(ロマ1:4)。

2. ヨハ

v.13「天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。」

復活して天に上げられたキリストが、(司祭を御自身の代理者として用いて)私たちのミサを司式し、救いをもたらすいけにえを秘跡的に再現してくださいます。私たち信者の奉獻は、ミサの中でこのキリストのいけにえと一つに結ばれます。

この天に上げられたキリストは、十字架につけられたキリスト(1コリ1:23)と同じ方であることを、私たちは忘れてはなりません。カトリックの多くの御聖堂で、祭壇上または祭壇の近くに置かれている磔刑の十字架像は、私たちのミサの本来の司式者である天上のキリストが、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順で」(フィリ2:8)あった私たちの救い主であることを象徴しています。

このことを目に見える形でより明確に表現するために、2000年7月に改訂されたラテン語規範版第3版「ミサ典礼書の総則」(邦訳はない)は、祭壇上に置かれる十字架には、はりつけにされたキリスト像がなければならぬと規定しました(カトリック新聞2000.8.16号)。

3. 民

v.9 「モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」

イエス・キリストを信じる者、私たちのミサに臨んで信者一人一人と会ってくださる天上のキリストを仰ぐ者たちは、永遠の命を得ています。

しかしキリストを信じない人々、十字架を見上げて天上のキリストを礼拝することをしない人々は、救いを得ていないのであり、「死にとどまったまま」(ヨハ3:14)であり、「既に裁かれている」(ヨハ3:18)とさえ言われているのです。

十字架は昔も今もキリスト教と教会の象徴であります。しかし私たちの信仰は、ただの十字架に対してではなくて、そこから勝利の復活によって天に上げられた現在のキリストへのものです。実に天上のキリストは生きておられ、「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(フィリ3:20-21)

アーメン、ハレルヤ。

9月21日 年間第25主日

知 2:12,17~20 ヤコ 3:16~4:3 マコ 9:30~37

1. マコ v.30-32

主日B年の福音書の日課は、今年は十字架称賛の祝日に当たったために先週読まれなかったイエスの第一回目の死と復活の予告の話を経て、今朝の二回目の予告へと進んでいきます。そしてここから、年間第29主日までの5回的主日に亘って連続して朗読される部分(マコ9:30-10:45)で、マルコ福音書は主イエスがどのように弟子たち(使徒たち)を教育されたかを述べています。この部分は一連の物語りではなくて、多くの伝承を集めたものなのですが、その全体を総合的に読むことによって主イエスの意図を理解するように編集されているものです。

この機会に一つ指摘しておきたいことは、聖書を学ぶときにその中のある一つの聖句、ある一つの挿話を、前後関係やその文書全体から切り離して解釈してはならないということです。聖書を学ぶための基本原則として、心に留めておきましょう。

主イエスは、これまで一般のユダヤ人たちが期待して来たメシア像とは異なる性格の、革新的なメシア理解を語られました。そしてそれは当時の弟子たちには「この言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった」(v.32)と書かれています。しかし主イエスが復活された後に、弟子たちは正しい理解を与えられます(使1:3参照)。

この予告の中で、鍵となる言葉は「引き渡され」(v.31)です。キリストの受難は神の計画でありました(使2:23、ロマ4:25)。御子が受肉して「わたしたちの罪のために死に渡され」たとはどういうことであったかを、今朝の旧約の日課である知恵の書は語っています。

弟子たち(後の使徒たち)とは、「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」(イザ53:5)ことを理解する恵みを与えられた人々でありました(1ペト2:22-25)。

2. マコ v.33-35

v.35 「イエスが座り、12人を呼び寄せて言われた。“いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。”」

この主題は マコ10:43-45を補って初めて正しく理解できます。使徒たちとは「キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したい」(フィリ3:10-11)と考えるようになった人々でありました。

3. マコ v.36-37

このテキストは、かつてキリスト教の幼児教育推進のための愛唱聖句として、大いにもてはやされたものです。「イエス様はたいへん子供たちを好きでした」などと語って、それでキリスト教主義の主張をしている(福音を宣教している)と思い込んでいた多くの善良な教師たちのことを、私たちは笑うことは出来ません。その程度の聖書理解しか教えることも学ぶことも出来なかった20世紀の教会の中で、私たち自身が生まれ育って来たのですから。

テキストのこの部分を、10:15と置き換えて読んでみてご覧下さい。また9:41の「キリストの弟子」や、9:42の「これらの小さな者の一人」をこの部分に結びつけて、マルコ福音書が何を伝えようとしているのかを考えてみましょう。まず使徒たち自身が、生涯「これらの小さな者の一人」でありました。そして何よりも「子供のように神の国を受け入れる人」(10:15)であったのでした。

4. ヤコ

v.17 「上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません。」

使徒たちはキリストではなくて、キリストによって遣わされた人々でありました。使徒たちは教会の信徒に向かって「わたしに倣う者になりなさい」(1コリ4:16)と語りました。使徒たちが自ら「子供のように」「小さな者の一人」「すべての人の僕」になったように、教会の信徒に「純真で、温和で……」あることを教えました。それは代々の教会の信徒が、使徒たちの理解したようにキリストを理解し、使徒たちが語ったように福音を理解し受け入れるためでした。

今日に至るまで、代々の教会に使徒たちの後継者である司教たちが任職されて来たのは、歴史の教会が根本的に、終末の日に至るまで、イエス・キリストに依り頼む存在であることを公に示し続けるためでした。天上のキリストは、私たちすべてのキリスト者が、聖伝と聖書によって、使徒たちから伝えられたとおりに福音を理解することを望んでおられるのです。 アーメン、ハレルヤ。

9月28日 年間第26主日

民 11:25～29 ヤコ 5:1～6 マコ 9:38～48

1. マコ vv.38-41

今朝の福音書のテキストの中で、次の三つの用語は同じ一つのことを指し示しているように思えます。「お名前を使って」(v.38)、「キリストの弟子だ」(v.41)、「わたしを信じる」(v.42)。これらはすべてイエス・キリストへの信仰、キリストの福音への信仰を主題としています。

使徒パウロはこの主題を述べて次のように語りました。「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:16-17) 使徒たちはこの福音への信仰とその宣教のために、生涯をささげた人々でありました。

ただの親切心からではなくて、キリストの福音への信仰の共有という共同体的な愛によって、この使徒たちの宣教に援助と協力を惜しまなかった代々の時代のキリスト者がいつも存在したということが、現代の教会を支えています。それは原始教会の時代の人々だけではなくて、現代の教会の奉仕者たちにも当てはまります。

v.41 「はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

2. マコ vv.42-48

イエス・キリストへの信仰、キリストの福音への信仰は、使徒やその後の時代の教会の教導職だけが専有しているのではなくて、「これらの小さな者の一人」(v.42)である信者たちのものでもあります。

「つまずかせる」という言葉が、ここでは他人に対する場合と自分に対する場合の両方で用いられています。いずれの場合にもそれはキリストへの信仰に関わる問題であって、前者では他人の信仰を尊重しないでこれを軽んじるような場合がこれに当てはまります。使徒パウロの言葉を引用すると、次のようになります。「なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。」(ロマ 14:10) 「キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。」(ロマ 14:15)

後者は、キリストの福音に対して目が見えず耳が聞こえない状態のことを指しています。主イエスは「わたしにつまずかない人は幸いである」(マタ 11:6) と言われました。神の子キリストにつまずき、キリストの福音につまずくことは、何ものにも代え難い損失であります。

3. 民

教会には聖職位階にある人々や、いろいろな奉仕者もいれば、その他一般の信者たちもいます。また一人一人はその知識や経験、能力や熱心さ、キリスト者としての自覚の程度についても千差万別です。しかしそれはキリストの体であり、御子の血で贖われた共同体なのです。

梅村司教の司牧書簡の中に引用されているヨハネ・パウロ二世教皇の言葉を思い起こしましょう。

「教会は共同体としての交わりであり、この交わりが部分教会と普遍教会との間、司教の団体性と教皇の首位性との間に存在すべきこと、同様に神の民のすべてのメンバーがそれぞれにふさわしい形でキリストの祭司的、預言者的、王的な務めにあずかる者であり、信者すべて、なかでも信徒も義務と権利をもつ者であるということです。また、教会がエキュメニズムのために払っている努力も、そのような要素のひとつになっています。」(交わりとしての教会をめざして p.4)

イスラエルの長老の中に加えられていたが、皆に一步遅れをとって宿営に残っていた二人をも、主は同じように霊を授けて、神のことはを預言する者とされたと、聖書は語っています。

神のことは、キリストの福音を聞き取り、これを学び、さらに宣べ伝えることは、一部の人々だけが独占することではなくて、すべての主の民に開放されているというのが、キリスト教会の伝統的な考え方であり、大切です。大切なことは、それがキリストへの信仰、キリストの福音への信仰という確かな内容を備えていることなのです。キリストに賛美。 アーメン、ハレルヤ。